

企業名：住友電気工業株式会社

レポート名：統合報告書2022

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

十分に理解することができる。住友電気工業株式会社（以下、住友電工）は従来5年ごとに目指す姿を計画し、実行してきた。しかし、地球規模で社会変革が起こっていることを踏まえ、それを一新し、統合報告書2022ではより長期的に計画した2023ビジョンを記載した。さらにこのビジョンの目標を達成するために2023年度から3カ年ごとに具体的な事業計画を立てている。2030ビジョンではエネルギー分野、情報分野、モビリティの特に重要な3分野について課題を提示し、その問題について従来のどの商品をどのように改善するかということや社会課題に対応する住友電工の取り組みが示されており、具体的でわかりやすい。また、住友グループが保持してきた住友事業精神や、住友事業精神を踏まえ、住友電工が創業100周年を記念して製作した住友電工グループ経営理念、ITバブル崩壊後に現在の取締役会長が社長であったときに再び強い会社にしようと思い、掲げた言葉である“Glorious Excellent Company”が紹介されるなど2030ビジョンといった事業計画を立てるときに参考にするであろう思想や経営理念も詳しく記載されていて、住友電工の目指す将来の姿について想像することは容易である。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

理解することができる。住友電工の強みは技術革新である。例えばモビリティ分野についてはアルミハーネスを販売している。これは自動車の機能増加に伴い、搭載される電子機器は増加している中、それらの機器をつなぎ、さまざまな電気、信号を車内のすみずみまで伝えるために自動車内に張り巡らされた電気配線網であるワイヤーハーネスの一種であり、車両の軽量化を可能にする。2010年より販売され、現在を使われており、長い間この分野で競争優位を保っていることがわかる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

競争優位性に持続性があると思う。住友電工が2030ビジョンで今後の展望を詳細に計画し、次に開発することを目指す商品のイメージが細かく計画されていることに加え、研究開発や知的財産の活用についても詳しく記載されており、売り上げも圧倒的であり、開発のための財産が尽きるとも考えられない。さらに、住友電工は闇雲に技術開発を行うのではなく、質を重視した技術開発を行うからアルミハーネスのように開発した商品は長い間使用される。また、販売市場も世界各国に伸びており、十分な市場が確保されている。以上の理由から住友電工の競争優位性には持続があると思う。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

この会社で自身の人的資本の価値向上を達成することはできると思う。住友電工は人材育成については本人の自己啓発への強い意欲と職場上司の指導と対話が必要であると考えており、そのために、目標管理・キャリア対話、業務遂行、人事評価・ローテーションのサイクルを回している。特に後者については「企業行動憲章」、「Code of Conduct/行動規範」において人種の尊重、差別・ハラスメントの禁止を明示している。また、住友工業はグローバル企業である強みを生かして、グローバルで優秀な人材を育成し、個社を超えた配置、登用を促進し、様々なキャリアを提供するとともに地域、国レベルで共通の経営課題にグループ一体として、取り組むエリアコミティ活動を通して次世代リーダーの育成を促進している。以上の観点から、自身のスキル向上は可能であると考えている。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

統合計画書は目に見えない企業の価値を伝えるために企業が作っているものであるが、役員や社外取締役の紹介、財務諸表などのコーポレートデータの情報も付け加えてあるところがほかの資料を見る必要なく、企業の分析をある程度可能にするので良いと思った。一方でグラフなどが多く挿入されていて情報が多く手に入るという点ではわかりやすいが、一目見たときのわかりやすさという点ではすこしわかりにくい印象もあったので、一目見て理解できるような概要をまとめた部分があると良いなと感じた。また、今後の展望についての記述が多く、現在の会社の分析の記述量が少ないと感じた。